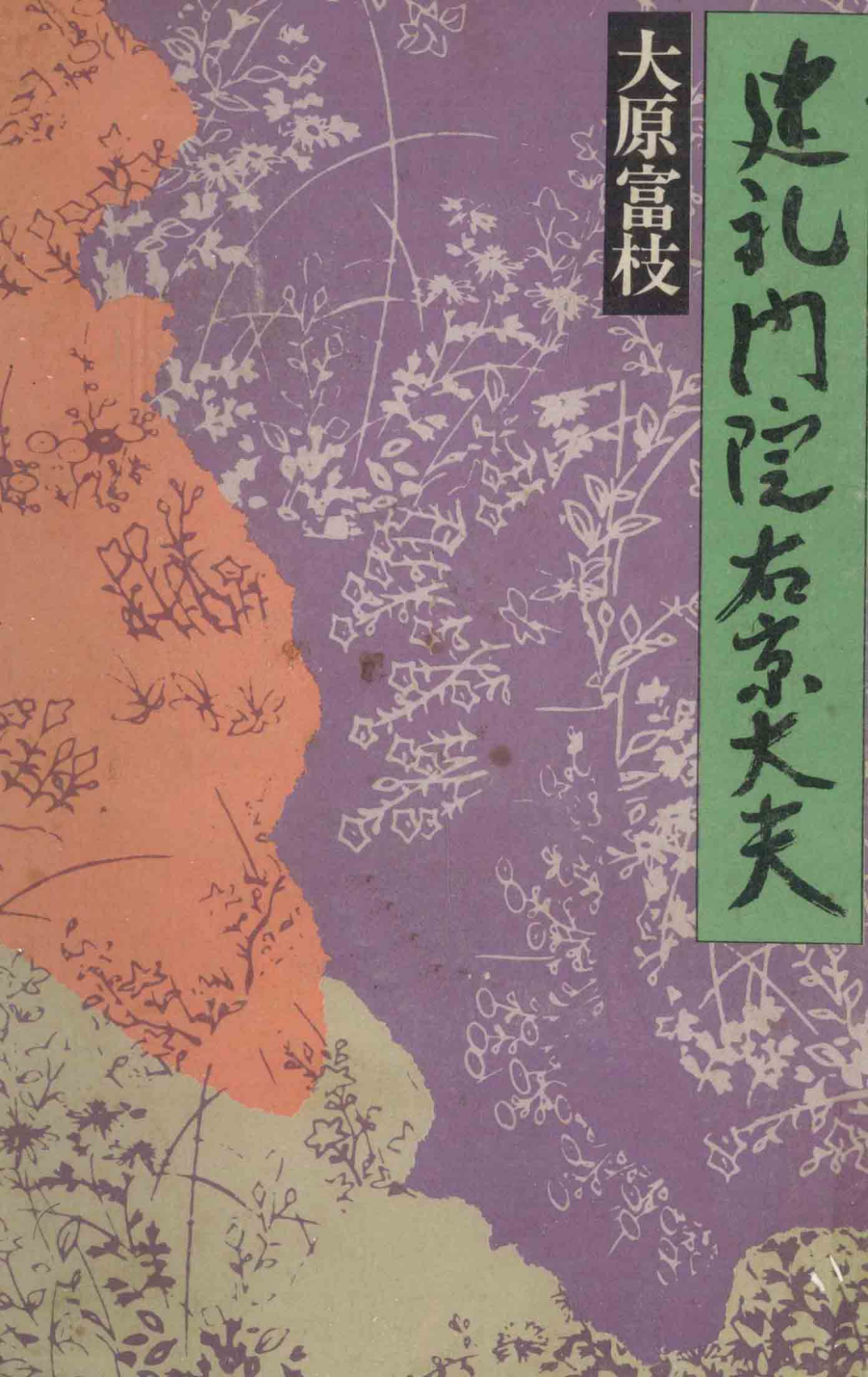


建礼門院右京大夫

大原富枝



建礼内院右京大夫

大原富枝

建礼門院右京大夫

昭和五十年四月十六日 第一刷発行
昭和五十二年三月十八日 第十五刷発行

著者 大原富枝

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二一―二二―二 郵便番号 一一二
電話 東京 (〇三) 九四五―一一一 (大代表)
振替 東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 大製株式会社

© Tomie Oohara 1975 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

定価はカバーに表示してあります。

装幀
朝倉撰

建礼門院右京大夫

京都の北の郊外、大原に寂光院を初めて訪ねたのは、春の終りというよりももう初夏という方がふさわしい、よく晴れた一日であった。

いまのように、京都といえは觀光客が溢れているということはなかった。高野川に添って走る若狭街道をゆくバスの中も混むというわけでもなく、戦争中の乏しい物資のなかでつましくやりくりして暮している里人たちが二人、三人と途中の村で下りてゆき、紫矢紺のお召のモンペをはいている私も物見遊山という気持ではなかった。

東京ではすでに防空演習が行われていた。そのようなさし迫った情勢のなかを抜けて、洛北大原に寂光院を訪ねる私の気持には、寂光院よりもむしろ別の目的があった。

若狭街道でバスを下りて、川原への小径をつたって小さい橋を渡る。菜の花の咲く細道をぼとりぼつり黙って歩いていった。

里道の細く極きままってゆく山懷に、寂光院は静かに晩春の陽を浴びていた。柴折戸しおりどをはいつて奥深く、せまい石段を上ってゆく。年経としりて乾き割れているみ堂の縁側にも陽の温みがしみ透っていた。茶室の棟越しに眺める比叡連山の若葉の緑の美しさは、うっとり眺めて氣も遠くなりそうな、自然の生命の永遠さを感じさせる。女院が眺め、後白河法皇が眺め、この小説の主人公、建礼門院右京大夫の眺めた緑の若葉の雲であった。

寂光院の門前の小径を小さい土橋を渡ってゆく左手に、せまってくる山の斜面にせまく不揃いな石段が心細くも数十段つづいていて、その上の数本群れ立つ樹蔭に、竹の四ツ目垣を廻らせた

中に、ささやかな一群の石塔がある。

この山の斜面こそ、「平家物語」の「大原御幸」の章のなかに、

「さるほどに、うえの山より、こき墨染の衣きたる尼二人、岩のかけじを伝いつつ、おりわずらい給いけり。法皇御覧じて、『あれは誰ぞ』と御尋ねありければ、老尼涙をおさえて申しけるは、『花がたみ肘にかけ、岩つつじ取り具して持たせ給いけるは女院にて渡らせ給いさぶろうなり』……」

とある、その山の小径であらう、と私は思った。

石段の上にある一群の石塔は、女院に奉仕して、ともにこの地に生命を終えた、阿波内侍（藤原信西の女）、大納言佐局（平重衡の妻、安徳帝乳母）、治部卿局、そして建礼門院右京大夫の墓である、里人たちは伝えている。

苔むして石の肌は見えない四角な台石の上に、これも苔むした宝珠と笠石、その上にもう一つ宝珠の載せられている小さい墓石が、そこに仲よく、肩を寄せ合い、いたわり合うように四基並んでいる。粗末な竹の四ツ目垣に囲まれた女ばかりのつつましくさやかな奥津城を、私は暫くのあいだつくづく眺め、朽ちかけた竹垣の周りを徘徊して、彼女たちの生涯を思った。

建礼門院右京大夫の墓といわれるものが他にまったく聞かれない以上、このなかのどの一つかが彼女のものであると思われるのである。

今やゆめ昔やゆめとまよはれていかに思へどうつつとぞなき

仰ぎ見しむかしの雲の上の月かかるみ山の蔭ぞかなしき

彼女は、平家滅亡の年の翌年、ここに女院を訪ねて、昔に変わる御有様に声をのんで泣き、この

ような歌を詠よんでいる。そしてまた、

山深くとどめおきつるわが心やがてすむべきしるべとをなれ

しかし彼女がここに住んだという記録はまったくない。

一 散りのこる言の葉

一条京極の民部卿定家みんぶのきやうていかから御文があつて、

「このたび、再び勅撰集を編みまいらすべしとの御下命をお受けしました。ついては、あなたのお手許にもさぞや詠み置かれた歌のかずかずがあることと思います。見せていただきたく……」
と仰せであつた。

思いもかけぬお申し越しと、しばらくは御文を眺め入り、読み返し、たしかめてみずにはいられなかつた。

定家卿の御手蹟ていかのきやうては、大層類たぐひなくおもしろいもので、世の常の上手とはいささか異風のおもむきながら、その強い筆勢には並々ならぬ御精神ごしんの力が溢れ、ほとぼしってお見事である。あの御方よりほかのどなたのものでもありようはない。

お若いころから、常日ごろ病弱でいられ、病みがちの御方の、みずからの身体ひとつさえ思いのままにならぬお歎きは、わたくしもよく存じ上げている。そういうひとの、内にこもる情念こころのねんの

はげしさ、想いの濃密さこそ、このような独自のつよい御手蹟に凝ってゆくのであろう。

今日、久しぶりに拝見する御手蹟は、お若い日々のそれよりも、さらにさらにその趣きが濃くなりまざったように思われた。懐かしさがその御文を見るうちにも胸をつまらせてくる。

思えばこのような御文をたまわることを、わたくしは密かに待ち望んでいた日々があった。一度ならずあった。

わたくしの書や筆をこそ、ひとは少々もてはやしては下さるものの、歌詠みとしてのわたくしはひとの数にも入れられてはいないのだ、と、よくよく納得しているつもりではあった。しかし、心の底にはやはり肯いきれないものがあった。

そう、あれはまだわたくしが二十代の末のころであった。忘れようとしても忘れることはできない、あの不幸な出来事のあった寿永二年という年、定家卿の父ぎみ、俊成卿に、後白河法皇さまから新しく勅撰集の御下命があった。そのとき、わたくしはふと心がときめいて、いままで詠みすててきたたくさんの方々の歌のなかから、心にとめて書き残し、書き溜めている歌などを、整理してみる気持になった。

勿論、わたくしなどに書きとめたものを見せよなどと、お声がかかろうとは、ゆめゆめおもいはしない。ましてわたくしの愛惜してやまない歌は、女院さまはじめたてまつり朝敵というかなしいものになり果てた平家の方々に関わるものであったから、仮りにも勅撰集にはいるはずはなかった。

また将来ともそのようなことがあろうとも、そのときは思いはしなかった。歌詠みといわれるほどの人は、みな自分の歌を集めた家の集という草紙を、大切に文箱の底に秘めていられ、勅撰集のことが仰せいだされると、まずそれをとりだして、提出したり、そのなかのこれぞと思うものを写し出してさし出したりしている。

わたくしはそんな目当はなくとも、ときどき自分だけで眺めて、ああ、あのときはこうであった、あの方がこう仰せであつたなどと、思い返して懐かしむすがともしたい、と思つたのである。

もう五十年近くも昔のことで、そのころのわたくしはいかにも若かつた。若いというものは、ほんとうに不思議なもので、自分が若いということさえ真実にはわかることが出来ないであつた。あのころ、わたくしは自分のことを身も心もぼろぼろに破れ果てた哀しい女のように思いきめて、生きることさえもの憂いもののかきりに思い歎いてばかりいた。なんという心散りであつたらう。

いま七十路も半ばという年齢を重ねてきて、あのころの自分の姿を思いだすと、勿論懐かしく愛おしいけれども、一方ではなにやら恥かしいようなためらいなしには思い返せない心地がする。あのころ、わたくしは頑なに心を閉ざして昼も夜もただ一心に墨を磨り、歌を書いていた。そうしていることで、堪えがたい悲しみにやつと堪えられる、そんなふうであつた。

清らかな料紙を伸べて、その上に筆をはこんで水茎のあとの匂い映えてゆくのを見守る心の張り、紙の含む木皮や糊の微かな匂い、墨の香の入りまじって匂い立つ部屋の、しんと静かに澄み徹るたたずまいは、そこだけが傷ついた心の安らぐところであつた。

そこはかとなく仕合せな思いが湧いてきて、一雫また一雫と、心の傷の上に薬液のようにしたり落ちて、傷口をうすい皮膜でそつと包んでくれる。

墨の香には、えもいえない懐かしさがある。それはわたくしの生れ落ちた日から身の周りに絶えず漂つていた。父の家は、一代の名筆家として聞えた藤原行成卿の裔で、代々書を能くした。父の世尊寺伊行も能書家として名を謳われていた。

幼い日の自分のことを思い出してみると、浮んでくるのは、手習いの経机に向つて坐っている

自分である。そうでないときは、箏しやうの琴（十三絃）を弾いている。中庭に面した明るい部屋の子に向って坐り、墨を磨っている。あるときは筆をはこんでいる。父が、背後からわたくしの筆の軸の先を軽く握っていることもある。わたくしの前髪のあたりに、父の息が、微かな臭いのある息がかかる。別の日には、母と対むき合あつて箏の琴を並べて教わっている。

母の夕霧は、八幡の楽人として代々雅楽寮に仕え、笛の名手といわれた大神家の女おほみけであつた。殊に母の父、基政は天才ともてはやされた人で、母もまた箏の琴を弾じては当代に比べる者がない、とまでいわれた妙手であつた。

母の琴はほんとうに美しく、天人の楽というのはこのようなものであらうと、わたくしは子供のころよく思った。琴を弾いているときの母をじっと眺めているのがわたくしは好きであつた。父も母について琴を習い、なかなか見事に弾いた。父と母が合奏することも、わたくしの幼いころにはよくあつた。

母は若いころは中院右大臣家に勤めながら、傍ら大勢の琴の弟子を持っていた。父もまた、母の琴に魅せられた一人で琴を習いに通い、そのうちに十幾歳も年上の母に恋して、ついに結婚したのであつたらう。そのとき、母はもう、以前に愛し合つていられた俊成卿とのあいだに、わたくしの兄の尊円がいたが、兄もともにわたくしの父のところへ引きとられてきた。

母にはきつとたくさんさんの崇拜者があつたのであらう。たしかに琴を弾いているときの母は、なにか普通の女とは思えないような、冒しがたい魅力があつた。母が琴の前に坐ると、琴の方でなにか母の方へにじり寄り、惹きつけられてゆくように見える。琴のなかに棲む音楽の精が、歓びに震えて母の手を慕つてゆくのであらうか。子供であつたわたくしの眼に、琴と母とが一つになる一瞬が見えた記憶がある。

父と母とは大層仲が良かった。わたくしのもの心づいたころ、父はもう病弱になつていて、母

はいつも父を庇うように振舞っていた。右大臣家の出仕をやめて、東山の麓の大神家の邸の一つに住むようになってからは、父もこの家に泊ることが多くなっていた。

晩年の父はもう琴を合奏することもなく、ものを書いてばかりいた。俊成卿などとともに、「源氏物語」の研究をされ、「源氏物語釈」という本を完成されたし、「伊勢物語」の校勘をも試みている。「夜鶴庭訓抄」という本は、書家としての父の面目を十分に發揮された著書で、そのなかには筆についての蘊蓄をも傾けている。この部分は、いわば父と母との共著といつてもいいものだったにちがいない。母は、名人といわれた父、大神基政の笛の吹奏の秘密をよく見抜き、研究していて、それを箏に 응용することによって、独特の一派を編みだしたほどの人であったのだから……

わたくしの遠い記憶のなかに、一枚の絵のように残っている父と母と、わたくしのいる風景がある。父とわたくしは前栽のあたりに立っていた。冗談ともまじめともつかない妙な笑いをしながら、父がわたくしにいつている。おまえの母さんはね、素敵なひとなんだぜ、そのまま男にしてみても十分なひとだよ、男でなくて勿体ない、ということがあるが、母さんはもし男だったらいっそう勿体ないようなひとさ！ おまえもどちらかに似るとしたら、母さんに似てくれよ、いいかい？

わたくしは母の方を見た。母は縁の端近くにいて、黙って笑っていた。父の妙な笑いと少しちがう。もしかしたら、父をたしなめるような笑いであつたのかも知れない。しかし、子供のわたくしは、なにかふつと眩しいように感じた。眼をそらさなければならぬような、濃い愛情の見せつけのようなものを感じていた。父と母とは、稚い娘の前でこっそりお惚気をいつているのだ。わたくしを真中においているけれど、二人はお互いのことだけを思っていて、わたくしは除け者にされているのだ、というふうに感じていた。羞かしくて仕方がなかった。

このような育ち方をしたことを、いまのわたくしはほんとうに仕合せに思う。父方と母方の優れた芸術の血の流れは、わたくしの一身に集つて、書も音楽も生れながらにわたくしの血のなかにあつた。女の子は、生れるならばこのような血の筋にこそ、と人は思うであらう。

十六歳になつた秋、いまをときめく平相国清盛の御女で、高倉天皇の中宮（徳子）の御所に宮仕えにあがることになつたのも、ひとに立ち勝つて優美なわたくしの手蹟と、母から仕込まれて母譲りの妙手といわれた筆の技量を以つてであつた。

父祖代々から血のなかに享けた才能のありがたさと、父母のきびしい薫陶の賜物で、宮仕えのあいだわたくしは、同僚の女房がたの誰にも引け目を感じることなしに暮していた。そのことは、わたくしの生れつきの、勝気ながらも暢びやかで屈托なく、のどかな性質を損なうことなしに済んでいた。

十八の春に、かねて病弱であつた父は、母よりも先にみまかつた。しかし、わたくしは本当に不幸のおもいを感じることはなかつた。あの妖しい二つの恋を、殆ど同時に知ることになるまでは……

墨を磨つていると、煤とともに練りこめられている香が、顔のあたりにやさしく立ち迷い、滲むように部屋のかなかに溶けてゆくなかに、彷彿として浮びあがってくる面影がある。母のなにやら愉しげな低い含み笑い、父の、誰ともまごうことのないあの癖のあるしわぶきの声！

お使いの者に、とりあえずお返しを申して帰したあと、わたくしはもう長いあいだ絶えて覚えてたことのない心のときめきを抑えながら、文箱のなかから、歌の草紙をとり出して眺めた。長い年月、繰返し眺め眺めしてきて、いまは紙の肩も萎えくたびれた草紙に、もう一度じっくり眼を通し、料紙を新しくして書き直してゆこう。いま一度、歌のおもむきもよく味わつてみたい。古いものは手許に残し、新しく写し直したものを定家卿のお手許にさし出すことにしよう。

院（後鳥羽院）の御所を退るとき拝領した思い出の硯にたっぷり水を移し、わたくしの墨を磨る指に新しい力が溢れてくる。身内に湧いてくるこのような力の豊かさと、心のときめきを、わたくしはもうあやうく忘れてしまおうとしていた。

二十年近くも仕えまつた後鳥羽院が、あろうことか北の荒海の果て、隠岐に移されまいらせるといふ、筆にも口にもつくされぬ恐ろしい世とはなつて、それを機に御所を退つて以来、十年を、わたくしは秋の野末の虫のように、ひっそりと籠り暮してきた。

外には群盗が夜な夜な徘徊して、上辺のあたり、昨夜も火を放つたり、家々に押入つて女など殺したという。この飢饉つづきの数年、殊にも今年は夏近くから悪疫も流行して、街道に死体がつり片づけもせずあるという。

しかし、こうして墨の匂い、料紙の手ざわりのたのもしさに包まれていると、あのむかしの華やいだ日々が春の朝の靄のように身の廻りに甦ってくる心地がする。

歌詠みとしては人の数にもはいらぬ身と、十分承知していながらも、わたくしにも歌によつてしか確かめられぬ生きてきた日々がある。いままで二度も勅撰集のことが仰せいだされても、ついぞ求められることはなかったわたくしに、こんど初めて撰者からのお言葉があつた。琴でも書でもなく、歌詠みとして初めてお心をとめて下さつた。

これは、わたくしの堪えてきた日々の歎びと哀しみに、定家卿がふと足を止めることなしには行き過ぎがたくお思ひになつた、ということであらう。そう推量して、わたくしはありがたく、嬉しいのである。

俊成卿、定家卿という御父子二代によつて、御子左家は、昔の六条家にとつて代つて、歌学の家として御栄えになつてゐる。御二方とも、歌を生命に一筋に生きられて、和歌に賭ける面目と情念の烈しさは、わたくしなど仰ぐも眩しいばかりの輝きを放つておいでである。歌詠みの面目

と榮譽のためには、刺し違えても悔いしないほどのお覚悟がある。

殊にも定家卿は、生れながら歌詠みとしての鋭い感性に恵まれていられ、言葉の一つ一つに工夫を凝らされ、磨きをかけられて、誰も思いつかれぬ言葉の妙をふっと拾われ、他の人の聞かぬ心のひだの微かなおのきをも、心の耳にいち早く聴いておしまいになる。女心の秘め隠した身体奥にあるものを、ついと踏みこんであつと思ふまにもう掴んでいられる。

花の香はかをるばかりを行方とて風よりつらき夕やみのそら

梅の花にほひを移す袖のうへに軒もる月の影ぞあらそふ

ぬぎかへてかたみとまらぬ夏衣さてしも花のおもかげぞたつ

これらの御歌のなかに、わたくしの見るのは、花に化した女の怨み多い精である。このような妖艶な御歌いふりは、わたくしの女のおもいにふと妬たましいばかりであつた。

工夫に工夫を凝らされ、色や匂いがそのまま官能の秘密と通い合うような境地をつくりだされ、生命のたぎつ瀬がほとばしつて春の陽光と互いに輝きを競い合う、といった眩くらしいほどの絢爛さを生みだされる。心一つがそこに凝こっていて妖しく恐しい。

それだけに、わたくしのように、思いのままをただ素直に歌い出でた歌い振りには、もどかしい限りとお思ひであつたかも知れない。力弱く、生命を托たくするには足らぬ、とお退しりぞけであつたろう。いまのわたくしにはそれがわかるようになってゐる。

しかし、いまだしいものであつたとしても、わたくしにも自らの歌にだけ托たくしている生命があつて、たとい院や定家卿のような達人の思召おほしめしで、あれはこうだ、これはこうでなくてはならぬ、などと仰せられたとしても、やはりお譲りはできぬ情念おもひがある。

新しい歌の草紙のはじめに、わたくしはこう書いた。

「世に歌よみといわれるほどの人ならば、どなたも家の集といって、自分の作品を書きとめておかれる。けれども、これはゆめゆめそのようなものではない。あわれにも、かなしくも、なんとなく忘れがたく思うことどものなかで、折にふれてふと心に刻まれたおもいを、思いだすままに書きとめたもので、誰人に見せようものでもない、ただ、わたくし自分ひとりの心の慰めとして書いておく。

われならでたれかあはれとみづぐきのあともし末の世に伝はらば

「

承安三年という年の秋、盛りを誇る平相国の御女で、ときのみかど高倉天皇の中宮徳子の御所へ、わたくしは初めて宮仕えにでることになった。

父は、このときから二年あとの安元元年に亡くなっているように、もうこのころ身体の衰えがひどく先行心もとなく思っていたであらうし、母ももう若くはなかったので、末っ子で一人娘のわたくしの将来を思つて、宮仕えを考えられたものであらう。わたくしは十六歳であつた。

御所へあがつても、あなたは今までそのままのあなたでよろしいのよ。いままで通り暢びやかなお心でいらつしゃい。女房の方々のなかに立ちまじつても、心臆れすることはないだけのものは、身についているのだから。生れつきのままに、暢びやかに優しい女でいらつしゃい。母があなたに望みたいのはそれだけです。あとはあなたが自分で考えて、良いと思う通りになさい。それでいいのよ、と母は餞けにそんなことをいわれた。いかにも、自分の生きてきた日々、悔いを残してはいないひとの言葉であつた。わたくしは母のようによく出来た女ではなかったのに。

まだ自分というもののさえよく擱んでいなかったわたくしは、うかつなままに、自分を吟味することもなしに、屈托なく御所へあがったのであった。

出仕については、母のたのみで俊成卿が後見として何かと面倒をみて下さることになった。わたくしのための新しい女房名も、俊成卿の当時の官職名をいただいて、「右京大夫」と呼ばれることになった。身の廻りのものの支度については、母は、やはり俊成卿の御女で、母の箏のお弟子の一人でもある後白河院京極殿と呼ばれるまめやかな御方に万事相談して整えた。

そしてその日、わたくしを中宮の御殿である藤壺へ伴って下さったのもこの後白河院京極殿であった。後白河院の法住寺殿に長くお仕えして、御幸のときは唯一人の祇候として御車の後に乗ることが許されていられるほどの用いられようで、院中女房の第一位の方といわれていた。しかし大層お氣持の寛やかなまめらしい御方で、この後長く、わたくしはこの御方を、何につけても心だのみにするようになった。

初めて御所へあがる朝、さすがに心細いこちで参内すると、京極殿がもう参られていて待ち受けていて下さった。

そのときは何と申すところかも知らなかったが、あとで思い返してみると台盤所といって、中臈より下の女房がたの控えの間である部屋の間近くに坐って、奥へ御機嫌伺いに参られた京極殿を待っていた。

すると前裁のかげから、何やら穠のように弾みながら駈けてきたものがあって、わたくしは驚いて、声は立てなかったけれど少し腰を浮かして眺めた。

丸々と肥った仔犬の、珍しいまだらの毛並みもむくむくとしたのが、み格子の前までこぎつけてきて、きょとんと止まり不思議そうにわたくしを仰ぎ見た。その眼のきらきらと驚いているさまは、この世はただだ不思議なことばかりだと思っっているような愛らしさであった。ひとりで